2018年度第1学期　One Asia財団国際講座

「真理の探求：どこから来たの？何者なの？どこへゆくの？」

中国文化大学の第14回One Asia財団講座「アジア共同体：東アジア研究の構築と変容」は、徐興慶学長の要請で佐藤洋治理事長が「真理の探求:どこから来たの？　何者なの？どこへゆくの？」というテーマで講演しました。

佐藤理事長は講演に先立って本学の張鏡湖理事長と会見し、東アジアの経済状況を中心に意見交換しました。佐藤理事長の講義の内容は、民族、宗教、そして職業にまたがる75億人の人々に共通の基本的な問題を共有していくというものでした。100人以上の教師や学生が聴講し、熱い交流ができました。席上、徐学長から佐藤理事長へ感謝状が授与されました。

One Asia財団は2003年8月19日にNPOとして活動を始め、2009年12月21日に正式に設立されました。財団の目的は、各国がアジアにおける経済、教育、文化および民間の密接な交流を通じて地域文化の独自性を維持し、政治的紛争から離れ、相互理解を深め、安定した成長のためのアジアの統合に向けた一体化、平和的発展の共通の目標のために活動することです。未来の「アジア共同体」を創造することを目標として、財団は2011年以来アジアの優秀な大学を後援して、現在までに500以上の大学に資金を提供し「アジア共同体連続講義」を主催しました。その主な目的は、将来の「アジア共同体」の創造に向け、開設した各大学の学部・学科に補助金で支援し、講座を受講する優れた学生に奨学金を授与することです。

佐藤理事長のスピーチの後、奨学金は優秀な成績（合計NT $ 230,000）の上位20人の学生に授与されました。そのうち最も優秀な3名の学生は最上位の奨学金を獲得しました。大気科學部の翁一昀、日本語科の謝佳樺と陳宇萱で、各奨学金は480米ドルです。2番目のクラスには5人の学生がいて、420元のアメリカドル、3番目のクラスの12人には330ドルの奨学金が授与されています。受賞した学生の紹介文については、https://oneasia.pccu.edu.tw/testimonials.phpにあるこの講義ページを参照してください。

佐藤理事長は、「民族や国籍、思想・宗教、政治に関係ない」という3つの原則を強調した。講義の開始は、全体的なカリキュラムに沿って、学生が自分の限界を打ち破り、

アジアの政治、経済、文化、教育を理解し、相互の理解をより緊密かつ調和のとれたものにすることです。

2018 年 4 月、徐学長は「アジア共同体：東アジア研究の構築と変容」という名称で、One Asia 講演プログラムに応募し、5 万ドルの補助金を受け、本校は補助金を受けて実施する台湾 12 番目の実施大学になりました。このプログラムは 9 月から中国文化大学の外語学院が主催し、15 回の半年間の講義で、東アジアと東アジアの専門家や学者が学際的な研究を講義しています。学生に、東アジア諸国の国、国、歴史、文化、経済をより深く理解させ、学術研究の国際化を推進し、学術的基盤を作り、そしてアジア社会の可能性について考えさせる。また、One Asia レクチャープロジェクトの教育推進に合わせて、本セミナーの執行チームは、「人文社会科学対話：多面的な視点から」という 3 回の「全国大学生・院生研修ワークショップ」を企画しました。東アジア共同体と「国際社会と東アジア」を見てください。第 3 回ワークショップ「東アジアを取り巻く国際情勢」は、2019 年 1 月 19 日、暁峯記念館第一会議室で開催されました。

佐藤理事長による特別講演の要旨は以下のとおりです。

第二次世界大戦後、朝鮮戦争、ベトナム戦争、アフガニスタン紛争、そしてイラク戦争、そして IS 戦争が続いていますが、人類は依然として戦争の混乱の中にあります。ハンガリー出身のイギリス人作家アーサー・ケストラー（1905 年 － 1983 年）はかつて、「人類の究極の苦悩- 止むことのない人種内殺りく、これが『人間（人間)』であると語った。」イギリスの有名な歴史学者アーノルド・J・トインビー（1889 年 － 1975 年）は言いました：〝要するに、人間は遅かれ早かれ世界の包括的な核戦争のために自分たちを破壊するでしょう。したがって、私たちは自分自身を克服しなければなりません」

佐藤理事長はこれらの話を引用し、今日の人類が直面している危機は、軍事から経済戦争へ、そして貧富の格差へと広がっていると語りました。

佐藤理事長は、「自我と自己、企業と団体、国家と民族」という三つの壁に直面していると話しました。 第一の壁は「自我と自己」です。私たちが最も多く直面しているこの壁は、自分にとって最も有利で価値のあるものを常に考えていて、強い意識を築き、他の人には効果がないようにしているものです。この「自我」から卒業し、壁から出て

共に過ごす方法を考えると、75 億の人たちが平和に暮らすことができます。佐藤理事長は、国家の論理から、さまざまな主要な言説や国益のために紛争が起こる可能性があると考えています。しかし、国民は互いに調和して生きることができます。国家の運営がこれらの個人の声を発することを不可能にしているのです。 佐藤氏はこの三つの壁は破れると楽観視しています。私たちの生活空間は、国家の論理を超越し、そのような時代が早い段階で実現し、より良いものになると期待するべきです。

佐藤理事長のテーマは、「どこから来たの？　何者なの？　どこへゆくの？」です。その目的は、人間の基本的な命題である「自我とは？　人間とは？　永遠の絶対生命とは？　究極の物体とは？」を解明することです。 これらの基本的な人間の命題は、民族、国籍、宗教、職業を超えた人類の基本命題です。これらは 75 億人に共通する根本課題です。すなわち真実に近づき、真実を探る方法なのです。

真理は永遠的であり、完全的であり、否定することはできません。普遍性と妥当性の法則を備えています。そしていくつかの命題は他の命題と矛盾せずに整合性を備えています。真理の前には、民族、宗教、政治、経済、資本主義、社会主義、共産主義、貧富の差のようなすべての問題から生じる相対的な論争や矛盾はありません。すべての学問とすべての宗教には、「真理の探究」という最終目的があります。 知識自体は有限ですが、想像力には限界がありません。無限に真理に近づくには、想像力と構想力と信念の力量が必要です。そして佐藤氏は、宗教と量子力学が真理に次第に近づいていると考えています。

佐藤理事長は、真理の探求、真理に近づくことが、未来の人類の「自我のソフトウェア」(human ego = software) を、「人間のソフトウェア」(eternal absolute human = software)に変えていく、そのような時が到来してこそ、紛争が解決すると主張しています。One Asia 財団は、将来形成されるアジア共同体の中で、共同発展の体制と方法ができ、各民族の間の歴史文化が保存され発展していくことで、一個の、また各自の独立の平和と共生が融合した世界が形成されていくと述べました。

（執筆者：黄美惠・日本語科助教授、翻訳：武石信一）

本講義については以下の Web サイトを参照してください。

https://oneasia.pccu.edu.tw/facultydata.php?page=1